

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境と発掘史

第1節 遺跡の立地と地形

遺跡周辺の
地形

冬野川と稲渕川との水を集めた飛鳥川は、おもにその右岸に段丘面を発達させつつ、大字島庄から大字飛鳥にかけてはその西縁を流れ、甘檜丘と雷丘との間を抜けて、さらに北西へと流下している。この河川が形成した低位段丘面は、高いほうから岡面（低位段丘Ⅰ面）と飛鳥面（低位段丘Ⅱ面）とに区分されてきた（Fig. 1¹⁾）。岡面は島庄から岡、川原にかけての平坦面を

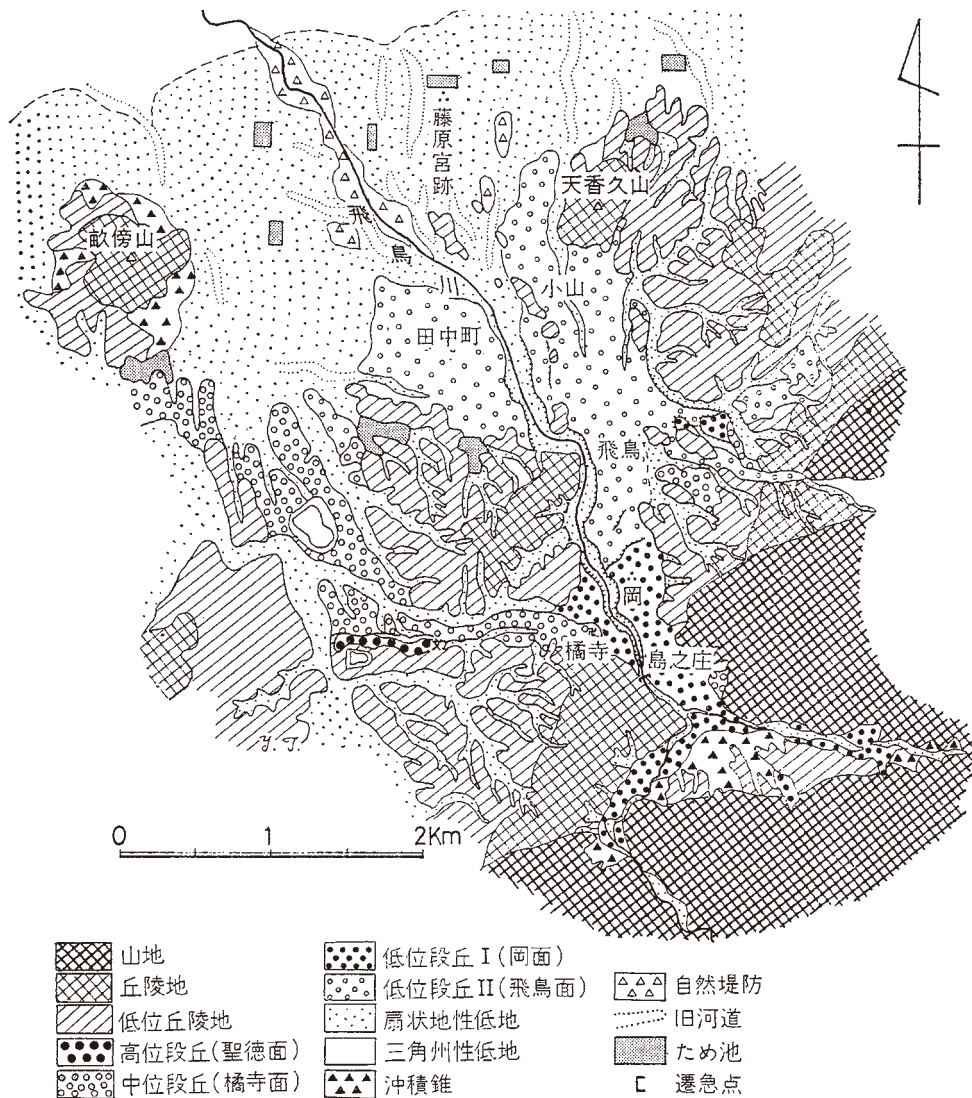


Fig. 1 明日香村周辺の地形分類図 1 : 50,000

指し、標高は約115～120mである。飛鳥宮跡や飛鳥京跡苑池は、この地形面上に立地している。岡面の段丘崖は飛鳥京跡苑池から奈良県立万葉文化館に向けて、南西から北東にかけて平野を横断しており、吉野川分水はこの崖線に沿って流れている。いっぽう、これより一段低い飛鳥面は、大字飛鳥から小山集落付近まで広く分布している。『日本書記』崇峻元年条に見える「真神原」は、岡から飛鳥にかけての原野を指すとされ、そこに建てられたのが飛鳥寺である。その創建以後、飛鳥諸宮をはじめとするさまざまな施設は、飛鳥寺を避けて営まれることになった。飛鳥寺の北側に位置する石神遺跡の遺構群が、飛鳥寺の創建時よりも古いとは考えがたい。石神遺跡の立地や性格を考えると、この事実は重要である。

大字飛鳥周辺では、この地形面は飛鳥川に向けて東から西へと緩やかに傾斜している。飛鳥坐神社前の標高は105.4mだが、水落遺跡のすぐ東側を通る段丘崖の上端（小字石橋付近）は標高102.4mで、その比高は3.0mである。また、この狭い平地の東西幅を、飛鳥川から飛鳥坐神社までの距離で示すと、それは500mに満たない。しかしながら、この間には飛鳥寺や水落遺跡・石神遺跡などが相接するように立地しているのである。

石神遺跡周辺の地形は、おもに東側から供給された砂礫が厚く堆積することで発達している。そこは西下がりの緩斜面で、東方から流下する八釣川が谷から抜け出て、中の川となる地点付近（飛鳥坐神社の北側）を扇頂とする、扇状地の扇端付近にあたると考えられる。この扇状地の勾配を、石神遺跡南側の東西道路で測ると、それは1.0%となる。²⁾ 石神遺跡や水落遺跡は、この小規模な扇状地の扇端付近に立地しているといえる。

2023年12月に史跡飛鳥水落遺跡東隣の個人住宅敷地内で実施した鑿井工事の立会調査（飛鳥藤原第215-1次³⁾）では、標高101.0mの深度にシルト層があり、その直下に厚い砂礫層が堆積しているのを確認した（Fig. 2）。ひと抱えもある巨礫を含むこの砂礫層は、湧水を見た現地地表下6.0mまでは確認でき、層厚は少なくとも4m以上である。礫は風化せず未固結で、低位段丘に相当する扇状地の基底礫層にあたると解釈できる。また、この立会地点の北50mに位置する石神遺跡第1～4次調査地でも、基盤層は同じ砂礫層である。第4次調査で検出した井戸SE800は、現水田面から5.4mの深度に達しており、その下底は標高95.7mである。このように、水落遺跡や石神遺跡の周辺では、水の確保が容易でない。こうした水利事情は扇状地に通有で、古代と現代とで大きくは変わらない。したがって、この地区では伝統的に、飛鳥川からの引水に多くを依存してきた。これにくわえて、農業用水の不足は、水田の脇に井戸を掘ることで補ったのである。吉野川分水の通水以前には、灌漑用の井戸が随所に見られたという。

飛鳥川の右岸に位置する石神遺跡周辺への導水を考えると、取水地として有力なのが弥勒石の近くにある「木葉堰」である。例えば和田萃は、木葉堰が7世紀後半には存在していたとし、小字石神で石田茂作が

扇状地性の
砂 礫 層

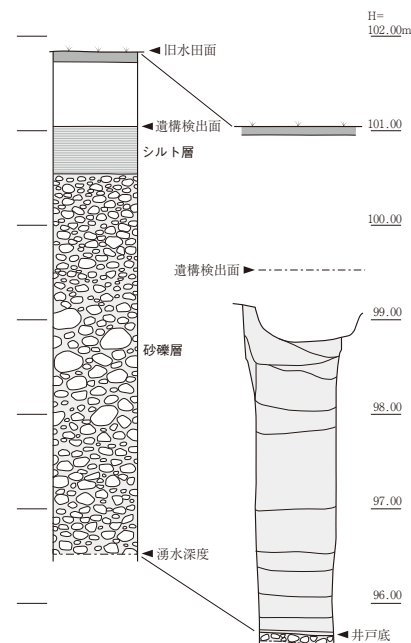


Fig. 2 扇状地礫層の深度 1:80

飛鳥川と
木葉堰

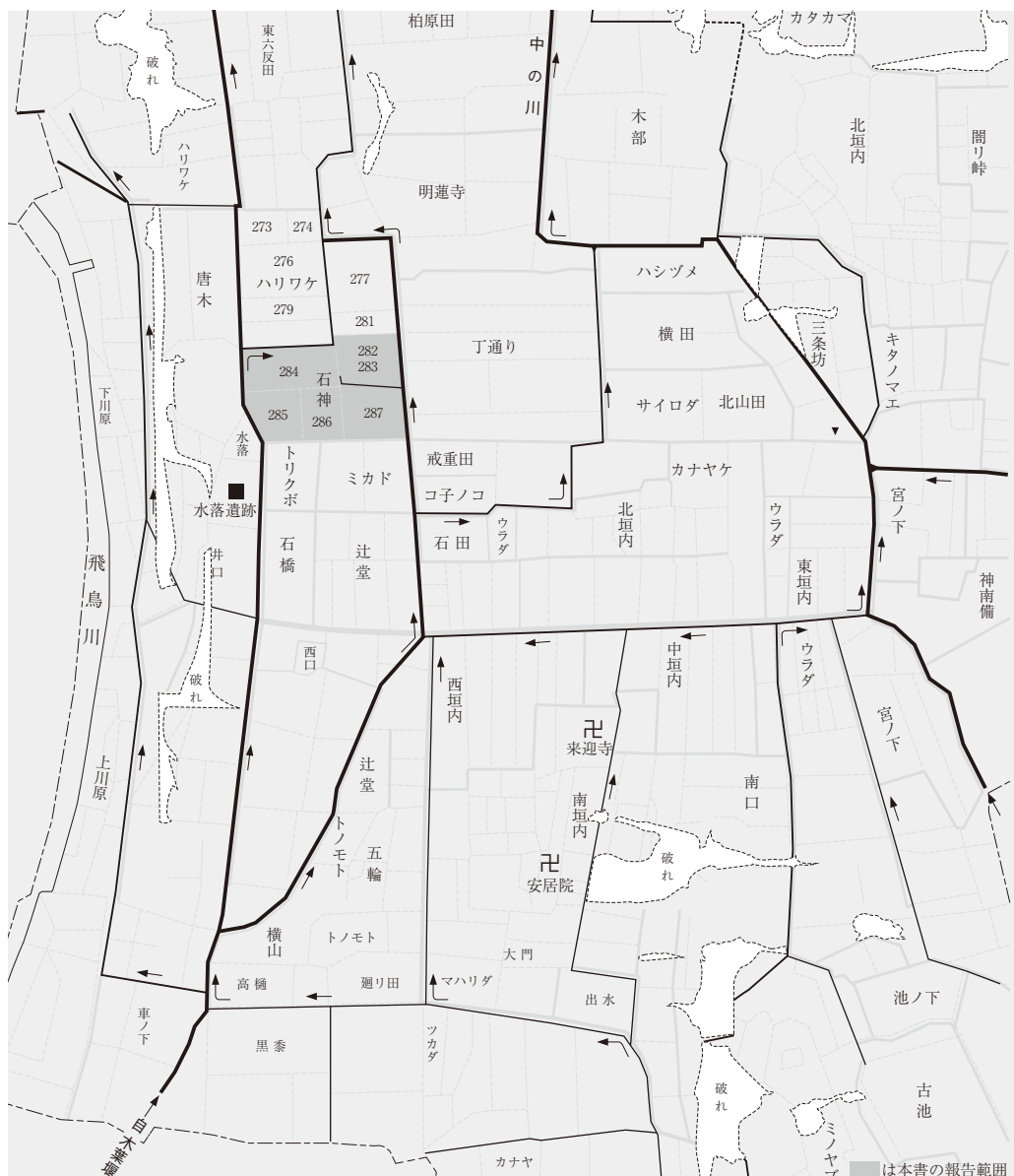


Fig. 3 明治24年製「大字飛鳥実測全図」に見える小字名と水路網 (矢印は現在の流向)

発掘した石組溝や、飛鳥寺西方の「大溝」が、この堰から取水していたと考えている。⁴⁾

鳥飛字大
凶全測実

明治24年製の「大字飛鳥実測全図」によれば、飛鳥川沿いに北へと流れる基幹水路が小字高樋付近で二股に分岐しており、直進する本線が水落遺跡と石神遺跡との間を抜け、さらに北へと続いている（Fig. 3）。この本線は、地元では「中水（なかすい）」または「六分川」と呼ばれた基幹水路で、現在は吉野川分水を取り入れる飛鳥工区第2号幹線となり、飛鳥面の水田を潤している。いっぽう、分岐点から飛鳥面の段丘崖に沿って延びる支線は石神遺跡第1次・第2次調査地のすぐ東側を通り、本線に平行しつつ北へと延びている。大字飛鳥周辺では、明治時代の地籍図に描かれた水路網がそのまま残り、水田区画も昭和30年代からほとんど変わっていない。⁵⁾つまり飛鳥川右岸域には、古代の地割や条里区画がよく残っている。石神遺跡で見つかった飛鳥時代の石組溝も、飛鳥川右岸のどこかで取水し、崖線に沿って北へ延びていたと考えられる。

これら本線と支線は、石神遺跡を縦断しつつ北へと流れている。しかし、その分枝には西下がりの地形に逆らうように、東へと延びている部分がある。その1つは小字石神の西北部で本

線から東に折れ、小字ハリワケの東縁を北へと延びる水路である。もう1つは小字戒重田・コ子ノコの南で支線から分岐し、広大な平坦地である小字丁通りの東縁を北へと延びて、現在の中の川へと落ちる水路である。「大字飛鳥実測全図」に描かれた明治時代の水路網は、農業用水が不足しがちな扇状地面上を灌漑するために、現在でも機能している。第IV章でも詳しく述べるように、第1・2次調査で検出した7世紀前半の石組溝SD335・435も、小字石神の東部（飛鳥283番地、第2次調査区）で東へ折れて丁通り地区へと延びている。むろん、この石組溝は灌漑用ではなかったはずである。しかし現在の水路網と重ね合わせて考えると、SD335・435は飛鳥川の水を小字丁通りまで導くための、飛鳥時代の基幹水路であったと推測できよう。

高家・八釣地区から東へと流下する八釣川は、飛鳥坐神社のすぐ北側（小字宮ノ下付近）で折れて中の川となり、北へと流れている。現在の中の川は奥山集落の西側を通り、大官大寺の南側を西に流れてから、香久山の西麓を北へと抜けている。人工的に曲折しつつ北西へと向かうその流れは、条里地割の影響を強く受けている。ところが、旧流路は米川水系に属していたため、橿原市南浦町付近で北東へと折れ、香久山の東南麓沿いに磐余方面へと通じていたと考えられる。これが、かつて田村吉永が唱えた「狂心渠」の跡である。それは奥山集落の北側で、明瞭な谷地形として残っている。

狂心渠の跡

奥山久米寺の西方では、奈良時代以前の南北大溝を検出している。その幅は20m以上で、田村が推定した「狂心渠」の一部とされる⁷⁾。その上流部にあたる飛鳥東垣内遺跡や飛鳥宮ノ下遺跡では素掘溝SD01が、飛鳥池東方遺跡でも流路SD1700が見つかり⁹⁾、開削時期は概ね7世紀中頃という。これらの大溝や流路跡も「狂心渠」の一部であろう。この深い溝渠は、その堆積物や八釣川の土砂によって、遅くとも平安時代には埋没している¹⁰⁾。その結果、石神遺跡が立地する扇状地面上は、八釣川の土砂が再び堆積する場となったと考えられる。奈良時代の流路NR310（本書IV章参照）は、扇状地面における地形発達史の枠内で理解する必要がある。

-
- 1) 明日香村「歴史地理学よりみた明日香村」『続明日香村史』上巻、2006年。
 - 2) 明日香村が作成した飛鳥寺跡遺構図（1/1,000、昭和54年3月測図）による。本図によれば、東西道路の両端間の距離は315mで、この間の高低差は3.1mである。
 - 3) この鑿井工事は水落遺跡第7次調査区の範囲内で、かつて検出した遺構を避けて実施された。
 - 4) 和田 萃「飛鳥川の堰一弥勒石と道場法師一」『日本史研究』第130号、1973年。
 - 5) 恵谷浩子「コラム 田んぼの水利を推理する」『水と暮らしの風景史 古地図と景観がひらく飛鳥』飛鳥資料館図録第77冊、2024年。恵谷によれば、飛鳥川右岸域の景観が保護されたのは、古都保存法（1966年）および飛鳥法（1980年）の功績が大きいという。
 - 6) 田村吉永『飛鳥京藤原京考証』1965年。
 - 7) 「奥山久米寺西方の調査（狂心渠推定地）」『藤原概報7』1977年。
 - 8) 明日香村教育委員会『酒船石遺跡発掘調査報告書一付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡一』2006年。
 - 9) 奈文研『飛鳥池報告 本文編〔Ⅲ〕』奈文研学報第71冊、2022年。ただしSD1700では、斉明紀では舟二百隻で運ばせたとされる「石上山の石」（天理砂岩）が出土しておらず、狂心渠であるとの確証は得られなかったと述べている（167頁）。
 - 10) 奈文研『飛鳥池報告 本文編〔Ⅱ〕』奈文研学報第71冊、2022年。SD1700の後期流路堆積物からは、10世紀に降る土師器杯・皿が出土している（183～185頁）。遅くともこの時期には、この溝渠はほぼ埋没していたと考えられる。

第2節 周辺の遺跡

先史時代の
飛鳥

現在のところ、飛鳥地域で最古の人工品は飛鳥池遺跡で出土した木葉形尖頭器と有舌尖頭器¹⁾（縄文時代草創期）である。近年、石神遺跡東方（飛鳥藤原第209次）でも折損した木葉形尖頭器²⁾が出土している（Fig. 4）。これらの尖頭器は単独で出土し、石器集中部等は未確認である。

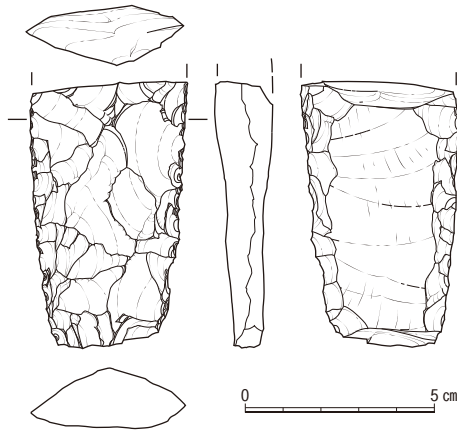


Fig. 4 石神遺跡東方出土の尖頭器 1:2

後期旧石器時代の遺跡は、いまだに見つかっていない。

石神遺跡では建物や堀の柱穴埋土から、細片化した古い土器が出土することがあり、その中には縄文土器片が含まれる。大官大寺第4次調査では、下層調査で検出した土坑や包含層から、中期末から後期後葉にかけての縄文土器がまとまって出土している。これらは北白川C式～中津式、縁帯文成立期、宮滝2式の3群からなるという³⁾。このように飛鳥地域でも、先史時代遺跡の存在が知られているが、それらは古代遺跡の下層に埋蔵されているため、発掘調査がおよぶ機会は少ない。

本書で報告する石神遺跡第1～4次調査区では、これまでに弥生時代の土坑が見つかるが、集落遺跡の発見にはいたっていない。これに対し、飛鳥寺から石神遺跡にかけては韓式系土器が多く出土することから、6世紀代に継続して集落が営まれたようである（Fig. 5）。石神遺跡第1次調査や飛鳥藤原第209・212次調査でも複数の竪穴建物を検出しており、古墳時代集落の遺構が実際に確認できた。さらに県道124号線の拡幅工事にともなう発掘調査（山田道第2・3次）では、石神遺跡の北方で古墳時代の河川跡と掘立柱建物、竪穴建物を検出し、河川の埋土からは布留式新段階の土器とともに朝鮮半島系の土器が出土している⁵⁾。西口壽生は、百済からの渡来人である「^{たなすえのてひと}手末才伎」を上桃原、下桃原、真神原に遷居させたとする記事（『日本書紀』雄略7年条）に着目し、これら古墳時代の遺構との関連性を指摘している⁶⁾。西口によれば、飛鳥川右岸における河岸段丘上の開発は、渡来人を入植させておこなわれたという。

古墳時代集
落と渡来人

石神遺跡周辺では、これまでのところ古墳は見つかっていない。しかし雷丘の発掘調査（飛鳥藤原第139次）では、6世紀前半頃の円筒埴輪が多数出土し、7世紀の小石室も検出された⁷⁾。雷丘東方遺跡や山田道第2次調査のほか、飛鳥川左岸に位置する平吉遺跡でも、7世紀代の整地土から円筒埴輪・形象埴輪が出土している⁸⁾。その来歴を考えると、雷丘周辺の丘陵尾根上に築かれた古墳群が、7世紀代の大規模な切土で消滅した可能性が高い。

飛鳥寺の
建

『日本書紀』崇峻元年条によれば、法興寺（飛鳥寺）は衣縫造の祖である樹葉の家を壊して、その跡地に建てられたという。この寺院の造営に先立ち、移住を余儀なくされたイエやムラが存在していたのである。現に飛鳥寺の西面回廊と西面大垣との間（西回廊J地点）では、6世紀の竪穴建物を一部検出している。また飛鳥寺周辺では、その下層の黒褐色土層から、飛鳥寺造営直前に遡る6世紀後半の土器群（「飛鳥寺下層」資料）が出土している¹⁰⁾。飛鳥寺一帯は「飛

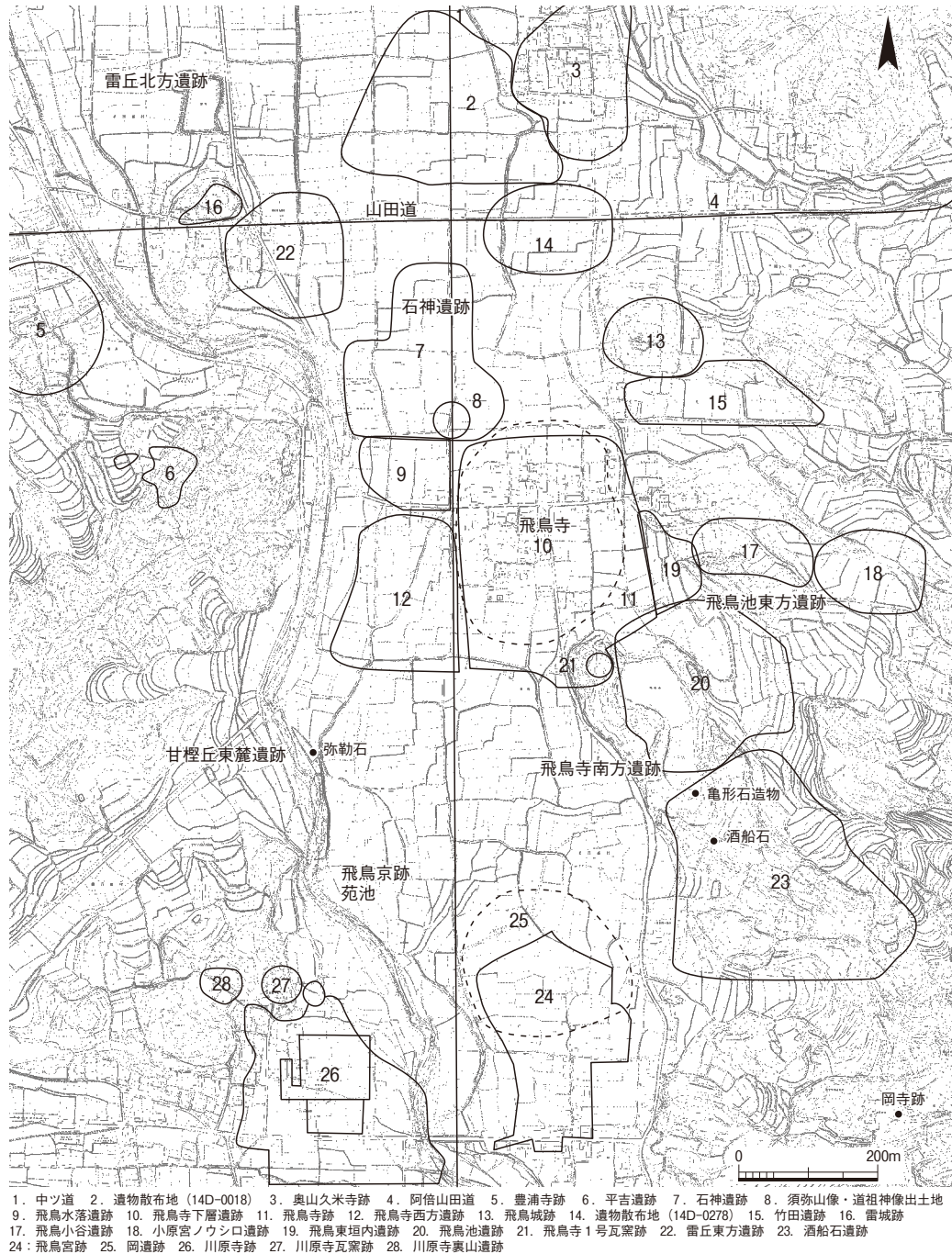


Fig. 5 大字飛鳥周辺の遺跡分布 (『奈良県遺跡地図』より転記) 1:10,000

鳥寺下層遺跡」という名称で『奈良県遺跡地図』に登載されている。

昭和31・32年(1956・1957)の飛鳥寺第1次～第3次発掘調査では、その伽藍のうち中金堂と東金堂・西金堂、塔などが発掘され、一塔三金堂という朝鮮半島伝来の伽藍配置があきらかになった。¹¹⁾これらの調査では南門に取り付く東西の築地塀の基底部と、西門の遺構も確認しており、寺域の南限と西限があきらかになっている。その後、昭和52年(1977)には安居院の北方約220mの地点において、北面の掘立柱塀SA500と、これに沿う外濠SD501・内濠SD503を検出した。¹²⁾次いで昭和57年(1982)には寺域の東北隅を確認し、¹³⁾飛鳥寺の寺域がほぼ確定した。現在のところ、寺域西北隅の遺構は未確認だが、その推定地は小字戒重田の水田西北部である。この地点は飛鳥寺西門前の南北道路と、『日本書紀』に登場する「飛鳥寺北路」(天武元年六月己丑条)との交差点付近にあたる可能性があり、その西北側には農道の十字路を隔てて、小字

石神の水田が隣接している。昭和39年（1964）の発掘調査では、小字戒重田の西辺近くで「瓦破片の堆積」を確認したものの、西面大垣の遺構は検出していない。¹⁴⁾

飛鳥寺西方
と西槻広場

飛鳥寺西門跡から飛鳥川右岸にかけての範囲を、飛鳥寺西方遺跡と呼ぶ。一帯は『日本書紀』に見える「飛鳥寺西槻」広場の推定地として、古くから注目されてきた。このため飛鳥寺西門前では、1960年代後半に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査（飛鳥京跡第11・18次調査）をおこなった¹⁵⁾ほか、奈文研も個人住宅の改築等にもなう発掘調査を実施しており、飛鳥寺西面大垣の遺構と、寺域西限の関連遺構群を相次ぎ検出している。このうち、西門および西面大垣の西6mの位置で検出した石組大溝SD6685は7世紀後半のもので、飛鳥寺の西外濠にあたるとされたが、その下層で検出した南北の掘立柱塀や土管暗渠は、それ以前の寺域西限か、あるいは西方遺跡の東限施設であると考えられた。¹⁶⁾

飛鳥寺西方では、明日香村教育委員会が継続的な発掘調査（平成21～29年度）を実施しており、この区域の全体像があきらかとなってきた。その成果によれば、飛鳥寺西門前が石敷広場として整備されたのは飛鳥時代後半になってからで、これが「飛鳥寺西槻」の広場にあたると考えられる。とくに入鹿首塚のすぐ西側にあたる上段地区の1・2区（平成24年度）では、敷石遺構SX14および砂利敷SX15を広範囲で検出し、砂利敷が樹枝状に欠落している部分（砂利敷欠落痕跡SX18）も確認している。この欠落部が西槻の樹根跡とすると、飛鳥寺西門からは槻木が間近に望めたことになる。¹⁷⁾

飛鳥水落遺
跡と漏刻台

小字石神の西側隣接地では、昭和47年（1972）に住宅新築の事前調査がおこなわれた。これは石造物出土地周辺に重要遺構の存在が予測されたためである。奈文研による発掘調査の結果、貼石遺構の西辺・南辺と、この貼石で囲まれた建物の遺構が検出された。この重要遺構の発見を受けて関係諸機関が協議をおこない、また土地所有者の協力も得て、当該地は昭和51年（1976）に「史跡 飛鳥水落遺跡」に指定された。昭和56年（1981）には史跡整備の目的で第2次調査をおこない、貼石遺構の中心部で礎石建の総柱建物SB200を検出した。そしてこの建物が、斉明6年に中大兄皇子が造ったとされる漏刻（水時計）の遺構であると推定されるにいたったのである。¹⁸⁾

漏刻の建屋にあたるSB200の中心部には漆塗の木箱が据えてあり、その基壇内には木樋暗渠や銅管も埋め込まれていた。これらは漏刻への給水と排水の機能をもち、余水はSB200から延びる小銅管や木樋によって、北側に位置する石神遺跡のほうへ導かれている。飛鳥藤原第165次調査の調査成果によれば、小銅管の据付溝SX275は水落遺跡第5次調査区の北端近くで二股に分かれ、一途はここでとぎれるが、木樋暗渠E（SD263）の埋設溝はさらに北へと延び、その続きは石神遺跡第11次調査区の北端付近で折れて西へと続いている。また、木樋暗渠Hは同遺跡の第10～12次調査区を縦貫し、さらに北へと延びていたことが判明している。¹⁹⁾飛鳥時代中頃の水落遺跡と石神遺跡とは、飛鳥川から引き込んだ一連の給排水系に属していたことがあきらかとなった。²⁰⁾

小墾田宮と
雷丘東方遺
跡

推古天皇の正宮である小墾田宮は、唐客の使主である裴世清が使の旨を奏し、新羅・任那の使人が朝庭に拝礼した宮殿として知られる。推古紀によれば、そこには南門・朝庭・庁・大門があり、南庭には須弥山形や呉橋が造られた。この宮殿の有力な候補地とされているのは、石神遺跡の北西側隣接地にあたる雷丘東方遺跡である。その第3次調査で検出した井戸SE01の

井戸枠内からは、埋土最下層を中心に9世紀代の土師器食器が出土した。²²⁾この中には「小治田宮」「小治宮」などと書かれた墨書土器が含まれており、奈良・平安時代の小治田宮が雷丘の東方に存在した有力な証拠とされている。民家新築にともなう第1次調査のときは、奈良時代後半から平安時代初頭に降る掘立柱建物群SB101・102・103等(Ⅱ・Ⅲ期)を検出しており、『続日本紀』に見える奈良時代の小治田宮・小治田岡本宮に関連する可能性を指摘しているが、²³⁾飛鳥時代の小墾田宮に比定できる遺構群は未発見である。推古朝の小墾田宮はなおあきらかでないが、²⁴⁾雷丘東方遺跡とその一帯に当てる説が有力である。

そのいっぽうで、推古朝の小墾田宮は石神遺跡の東側に位置していたとする見方がある。相原嘉之は石神遺跡が、須弥山形を建てたとされる「小墾田宮の南」(『日本書紀』推古20年条)にあたるうえ、整地土からは鉄鏃などが多数出土することから、壬申の乱時の「小墾田兵庫」に関連する可能性があると考えた。²⁵⁾その後相原は、「古山田道」の北側に位置する(仮称)石神東方遺跡が、小墾田宮の最有力候補地であると考えているにいたった。²⁶⁾石神遺跡の東方区域は、2024年時点ではほぼ未調査の区域であるから、相原説の正否を問うことはまだできないが、調査の進展によっては、飛鳥時代の宮殿遺構が今後発見される可能性がある。

小墾田宮
石神東方説

-
- 1) 奈文研『飛鳥池報告 本文編〔Ⅰ〕』奈文研学報第71冊、2021年。
 - 2) 松永悦枝・谷澤重里「石神遺跡東方の調査―第209・212次」『発掘調査報告2023』。
 - 3) 「大官大寺下層遺跡の縄文式土器」『藤原概報8』1978年、および加藤雅士「大官大寺の縄文土器(1)」『紀要2009』・石田由紀子「大官大寺の縄文土器(2)」『紀要2010』。
 - 4) 松永・谷澤、前掲註2)論文。
 - 5) 「山田道第2・3次調査」『藤原概報21』1991年。
 - 6) 西口壽生「古墳時代の飛鳥・藤原京地域」『あすか以前』飛鳥資料館図録第38冊、2002年。
 - 7) 「雷丘の調査―第139次」『紀要2006』。
 - 8) 「平吉遺跡の調査」『藤原概報8』1978年。
 - 9) 奈文研「飛鳥寺とその周辺地域の調査」『藤原概報15』1985年。
 - 10) 西口壽生「コラム 飛鳥地域の再開発直前の土器」『年報1999-Ⅱ』。
 - 11) 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊、1958年。
 - 12) 「飛鳥寺北方の調査」『藤原概報8』1978年。
 - 13) 「飛鳥寺および周辺地の調査」『藤原概報13』1983年。
 - 14) 奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡一』164頁、奈良県教育委員会、1971年。
 - 15) 奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県教育委員会、1980年。
 - 16) 「飛鳥寺の調査―1996-1次」『年報1997-Ⅱ』によると、SD6685の側石裏込土から出土した土器片から、その構築が7世紀後半に降るとされる。
 - 17) 「飛鳥寺の調査(1989-1・2・3次)」『藤原概報20』1990年。
 - 18) 明日香村教育委員会『飛鳥寺西方遺跡発掘調査報告書―飛鳥寺西櫓の広場の調査―』2020年。
 - 19) 奈文研『藤原報告Ⅳ』奈文研学報第55冊、1995年。
 - 20) 「水落遺跡の調査―第165次」『紀要2011』。
 - 21) 「石神遺跡第12次調査」『藤原概報24』1994年。
 - 22) 明日香村教育委員会『雷丘東方遺跡第3次発掘調査概報』1988年。
 - 23) 奈文研『藤原報告Ⅲ』奈文研学報第37冊、1980年。
 - 24) 小澤 毅「飛鳥の朝廷」『古代国家の形成』史跡で読む日本の歴史3、吉川弘文館、2010年。
 - 25) 相原嘉之「小治田宮の土器」『瓦衣千年』1999年、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。
 - 26) 相原嘉之「飛鳥寺北方域の開発―7世紀前半の小墾田を中心として―」『橿原考古学研究所論集16』2013年。

第3節 遺跡観の形成過程と発掘史

大字飛鳥小字石神の水田で、異形の石造物が最初に出土したのは明治35年（1902）のことである。これらの石造物は人物像1石と、出土直後から「須弥山」と呼ばれた3石との4石からなり、明治37年（1904）には東京帝室博物館に寄贈された。その後、これらの石造物は帝室博物館の倉庫で長らく保管されることとなった。¹⁾

石造物の
発見届

石造物の出土時から寄贈までの経緯は、これらのうち3石の一時所有者であった森国松が届け出た3通の文書に詳しい。この人物は当時、飛鳥村の村長を務めた有力者であった。その彼が提出した「埋蔵物発見届」と「解説書」「保管受書」（明治36年6月22日付）は八木警察署宛で、石造物発見時の状況を報じるとともに、一号石・二号石の大きさや特徴を詳しく記している（本書 附篇参照）。これらによれば、辻本家が所有する水田の畦畔に露出していた石造物2個を森が買い取り、そのうえで掘り起こしたのが明治35年5月頃であったことが読みとれる。つまり須弥山石のうちの2石は、耕作時に偶然出土したのではなく、畦畔に露出していたのである。また、警察署への届出は出土の1年後であったことから、森家が一時、これら石造物のいくつかを所有していたことになる。

石造物の
譲渡

小字石神出土の石造物は明治37年（1904）5月18日付で、石彫人物像は辻本宇吉、須弥山石は森国松から、奈良県経由で東京帝室博物館に譲渡された。²⁾ 辻本宇吉は小字石神の水田の所有者で、後年石田茂作に発掘調査を勧めることになった辻本定四郎の父にあたる。こうして一号石・二号石の所有者と出土地の所有者とが、機を同じくして石造物を帝室博物館に寄贈した経緯は、森が帝室博物館に提出した「上願書」の写しから推測できる。これは明治37年2月のもので、石2個が「客年御省ノ命ニ依リ差上置候処」とあるように、宮内省の命で献納することになったことがうかがえる。ただし、2石のうち1石は「当地ニ関係アル古石ナルヲ以テ土地ニ保存仕置度候間御下戻被下度候」と、その歴史的重要性に鑑み、返還を願い出ていたことも読みとれる。結局、石造物はこのとき返還されなかったものの、森は当地を「右石発見ノ場所ハ畏多クモ人皇十九代允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址」と考えており、石造物の出土地を顕彰し保存することも視野に入れていたようである。

飛鳥村長
森国松

森国松が明治37年2月の「上願書」で、当地が「允恭天皇遠飛鳥宮ノ宮址」とであると唐突に述べたのには、前年に森家を訪れていた高橋健自からの影響があったと考えられる。明治36年5月の雑誌『考古界』で、高橋は「遠飛鳥宮と飛鳥寺との舊址」という短文を発表している。³⁾ その中で高橋は、「遠飛鳥宮」が大字飛鳥の北垣内付近に存在したと考えた。この見方は、北垣内とその周辺の「ナッテンヅカ」「ダイリヅカ」「ミカド」という地名と、南殿・内裏・御門とを関連付けた付会にすぎない。しかし、高橋が大字飛鳥の小字名について詳しく述べることはできたのは、大字飛鳥在住の情報提供者がいたからである。遠飛鳥宮と飛鳥寺の伽藍構成について自説を開陳した高橋は、その末尾で次のように謝辞を述べている。「以上の調査に関して、飛鳥村長森氏が従来実地目撃せしところを話されしは、予が最益を得たところなり」。これらの情報は、明治36年頃に森国松が、高橋健自に話したものであった。

高橋はその後、同年10月にも小字石神出土の石造物を図入りで詳しく紹介し、これらを初め

て「須弥山」⁴⁾、「石人」と称した。この短文で重要なのは、その冒頭で石造物の出土と、それが森家に一時安置された経緯を詳しく述べていることである（本書 附篇参照）。その記事によれば、いわゆる須弥山石の出土は確かに明治35年で、学校増築（飛鳥小学校を指すか）のために水田畦畔に露出していた巨石を掘り出したところ、それが異形の石造物であったため、これらを森家の庭に一時安置していたことが読みとれる。ところが石人像は、高橋が甲・乙・丙號の各石を観覧した直後の、明治36年春以降に出土したようである。

小字石神の石造物は、出土直後に世間でさまざまな注目を浴びたようであるが、この時点でこれらを須弥山に見立てる学者がいた。高橋はその筆頭で、これらを「須弥山」と称したのは彼が最初であろう。高橋はこのときすでに、小字石神の地に関して、「この辺はもと允恭天皇の遠飛鳥宮の遺址に接すれども、予は之を齐明天皇の御時のものならむと推考せり」と述べ、齐明3年条の「作須弥山像於飛鳥寺西」、および同5年条の「甘嚮丘東之川上造須弥山」の記事を引用している。要するに、齐明紀に見える都賀羅・蝦夷饗応の史実と、そのたびに造立した須弥山との関係に着目したのは、この高橋説が最初である。また同年、重田定一（東京帝室博物館）が辻本家を訪れ、小字石神出土の石造物を実見したところ、「その形状及発掘地より推考してその三箇は齐明天皇五年制作の須弥山なり」と確信したという。重田説もまた、先の高橋説と同じ誌上に掲載された⁵⁾。ところがその後、小字石神の石造物に対しては、これらが須弥山ではなく、また齐明紀中に見えるものにも当たらないとする説が登場し、重田説は論駁を受けることになった。石造物出土直後の、考古学界における須弥山論争についてはこれ以上詳しく述べないが、これら石造物は帝室博物館への移管後も正体が定かでないまま、収蔵庫の一隅に長らく放置されることとなったのである。

高橋健自の
須弥山説

飛鳥小学校と、これに隣接する石神遺跡が飛鳥浄御原宮にあたると最初に説いたのは喜田貞吉⁷⁾である。石神遺跡の発掘史を考えると、喜田説の影響は小さくない。ここでは飛鳥浄御原宮説がどのように成立したかをあきらかにしておこう。

喜田貞吉と
浄御原宮説

享保年間の地誌『日本輿地通志』（通称『大和志』）は喜田説に先立ち、島庄の東南に位置する字上居⁸⁾を浄御原宮の推定地に当てており、類書も同様の説を採る。これは「浄御」・「上居」の音通にちなむものだが、宮殿をはじめとする諸施設を建てるには「上居の如き山間狹隘の地」はふさわしくないと、喜田は考えた。さらに天武崩御のとき、「京城の耆老男女が皆来りて橋西に慟哭す」と書紀に見える（持統元年八月丁酉条）のに着目し、その場所が「実に大字飛鳥附近の平地」以外になく、浄御原宮が「必ず飛鳥雷間に設けられしもの」と断定した。そのうえで喜田が着目したのが、飛鳥と雷との中間に位置する飛鳥小学校である。喜田によると、飛鳥小学校の正面には豊浦へと通じる橋が架かっており、明治44年（1911）3月にはこの橋の西詰で偶然円形の石柱が出土したという。喜田はこの石柱を根拠に、「浄御原時代の橋の位置、亦ここを距る遠からざりしを疑はず」としたうえで、「飛鳥小学校の東に小字石神と称する地あり。先年異形なる石製の遺物数個を発掘し、今現に東京帝室博物館にあり。其の附近に小字ミカドと称する地もあり。蓋宮城南門の地か。又、田畦の間狭小の芝地を存し、土人畏敬して敢て侵さざる処もあり。其の他付近には地中に並列せる巨石ありと伝えられたる処もありて、此の地が嘗て皇居の地たりしことを推測すべき数多の材料具備せるに似たり」と述べた（15～16頁）。喜田の考定では、浄御原宮は「……飛鳥岡本宮の南にして、法興寺の北に当り、

今の豊浦より飛鳥に通ずる橋の東、即ち今の飛鳥小学校より其の東裏の地は、殯宮を起したる南庭に当るものなるべし。小学校敷地の地ならしの際、数多の素焼土器を掘り出したるも、宮址と何等かの縁あるか」(17頁)という話になる。要するに喜田は、飛鳥浄御原宮は飛鳥小学校の東側、つまり現在の石神遺跡に所在していた、と考えたわけである。

中岡清一の
発掘調査

しかし喜田説は、小字名や口碑を相互に関連づけ、恣意的に解釈することで成り立っており、発掘調査の成果をふまえたものではない。石神遺跡で初めて発掘調査をおこない、実際に遺構を確認したのは中岡清一である。中岡は吉野郡中荘村宮瀧(現・吉野町)の吉野離宮でおこなった発掘調査について講演したときに、飛鳥村の上田喜八郎から「飛鳥村にも石葺あり」との情報を得て、昭和4年(1929)8月に石敷遺構の確認を目的とした発掘調査を実施した。これは石神遺跡とその周辺における最も古い発掘調査で、石舞台古墳の発掘調査(昭和8年)よりも古い。調査は飛鳥小学校の農業実習地(字唐木227)と、校舎東側の芋畑(字ハリワケ279)とでおこない、いずれでも「地下二尺乃至三尺」で石葺を確認したという。中岡説では、この石葺の広がり水持ちのわるい水田の範囲に一致し、その面積は約6,000坪におよぼした。その報告文の表題に見えるとおり、中岡は飛鳥小学校の付近一帯を「飛鳥浄見原宮址」と考えたのであった。

石葺の発見

現在、旧飛鳥小学校の敷地東北隅近くにある敷石遺構の露出展示は、中岡が唐木227に設けたトレンチのひとつである。いっぽう、ハリワケ279は奈文研がその第6次調査をおこなった水田にあたるが、中岡トレンチの正確な位置はわからない。

辻本定四郎

昭和11年(1936)5月25日からの2週間、石田茂作は小字石神の水田で発掘調査をおこなった。調査の経緯や経過は、石田の著作である『飛鳥随想』¹¹⁾に詳しい。石田によれば、この調査は小字石神の水田を所有する辻本定四郎から調査依頼を受け、石造物の性格をあきらかにするために実施したという。このときに重要なのは、小字石神の発掘を持ち掛けたのが帝室博物館側ではなく、石造物出土地の所有者のほうだったことである。石田は、石造物を屋外に陳列した「奈良時代出土品展覧会」の期間中に辻本が訪ねてきて、発掘調査をしてもらえないか打診されたと記している。辻本がいかなる意図のもと、小字石神の発掘を石田に勧めたかはあきらかでないが、いずれにせよこのとき、石造物をつうじた二人の交流が始まったと考えられる。

石田茂作の
発掘調査

発掘調査は辻本定四郎が所有している水田において、石造物が出土したとされる西北部で掘り下げをおこない、まずは「川原石群」¹²⁾を発見することから始まった。次いで、この川原石群の東側に掘り進めたところ、地表から約3尺の深さで「石敷」を確認した。ところが川原石群と石敷との間で石組の「溝」を発見したため、以後はこの石組溝に沿って南へと掘進し、さらに西へと掘り進んで石組溝の交差点を確認した。溝の発掘は北側の水田(小字石神282・283番地)にまでおよび、最後にはこの溝が東へと曲折する手前まで掘り進んでいる(Fig. 6)。

石田が発見した遺構のうち、川原石群の東方にある「石敷」はSB400南辺の石敷SX327(第1次調査)に、また「溝」はSD334・335・435およびSD330・331(第1・2次調査)にあたる。このほか、石田が「井戸」とみなし、奈文研の第1次調査でも井戸SE340と称した遺構は、その再調査(飛鳥藤原第214次調査)で東西掘立柱塼SA600東端の柱抜取穴であることが判明した。石田はこの大垣の柱穴を、図らずも発見していたわけである。

噴水塔説

石田茂作による小字石神の発掘調査は、斉明朝期の饗宴場説を生み出すことになった。石田

はいわゆる須弥山石を噴水塔とみなし、自らは須弥山説を採らないが、「斉明天皇五年条に「甲午甘樫丘東之川上造二須弥山一而饗三陸奥与二越蝦夷一」とあるのは、地理的にも遺蹟的にもこの飛鳥小字石神の地点をあててまず誤らないであろう」（『飛鳥随想』165頁）とも述べている。また、この調査に同行した帝室博物館館員の矢島恭介は、発見した石組溝と石造物とを関連づけつつ、「それは単なる須弥山ではなくてここは饗宴場であって、その会場の景物として作られた噴水塔の様なものであり、饗宴の会場は曲水の酒宴に擬して作られた造園であり、人物像は即ちその酒席にあって歓楽の興を添えるバカスの神であったのではあるまいか」と述べた。¹³⁾ 斉明朝の饗宴場説は、こうして成立したのである。それは喜田らの飛鳥浄御原宮説とはまったく異なる、新しい遺跡の見方であった。

大字飛鳥の辻本佳央氏宅には、昭和11年の発掘調査時に撮影された調査参加者の記念写真が伝存している（Ph.1）。発掘調査に帯同した写真技師が撮影したものであろう。人物群の背景には、昭和11年当時の景観が写っている。彼らの背後には、まだ「すすき」が点在し、田植えもしていない6月初旬頃の水田が広がっている。遠景の左手には雷丘の樹叢と民家が、中央右寄りには小山の森が写り、その右手には耳成山が霞んで見える。現地にて写真の背景との照合を試みたところ、撮影地点は小字石神287番地（現・飛鳥287番地）の西北隅付近と推定できた。この場所は、明治35・36年に石造物が出土した地点である。したがってこの写真は、石造物出土地付近に調査参加者が集合し、北西向きで撮影されたものと推測できる。写真右下隅に写るトレンチの脇には掘り上げた土を盛り、北側の畦畔には掘り出した石を並べている。写真右下に写る人物の足元にある掘り込みが、石田のいう「川原石群」と「溝の遺構」、それに須弥山遺蹟東方の「石敷」を確認した東西方向のトレンチに当たると考えられる。

この写真に写っているのは17名の男性で、発掘調査に協力した村民とみられる。¹⁴⁾ このうち、左から3人目で眼鏡をかけた人物と、右端の人物とは他と雰囲気異なるうえ、帽子の意匠が同じ（黒縁で2本線がめぐる）であることから、東京帝室博物館の館員とみられる。左の人物が石田茂作で、右端の人物が矢島恭介と推定できる。また、写真には横書きで、「石神 歴史の研究事業」と読めるペン字の書入れがある。おそらく、石田が書き込んだものであろう。

残念ながら撮影から90年近くを経た今、辻本定四郎がどの人物であるか、すでに特定できなくなっている。このことを知る機会は、すでに失われたのであろう。しかし、石田の発掘調査はこの人物が勧めたものであるし、調査の遂行には村民の協力があつたこともうかがえる。辻本と石田との関係は、石造物出土時の高橋健自と森国松との関係によく似ている。小字石神の

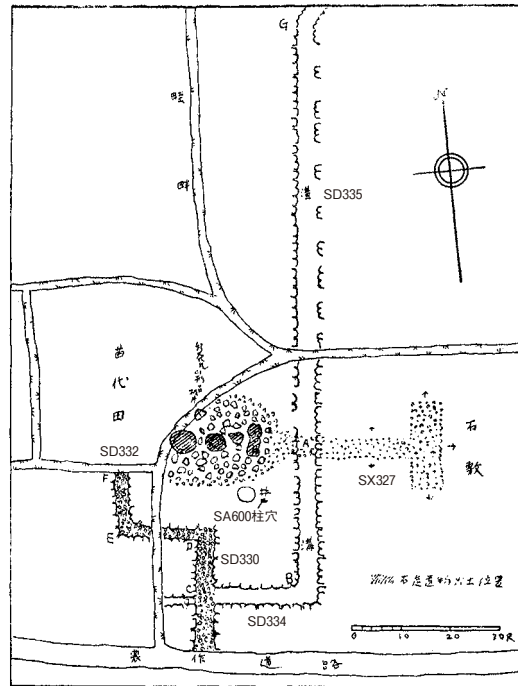


Fig. 6 1936年調査の実測図（『飛鳥随想』掲載図に加筆）

矢島恭介の
饗宴場説

辻本家の
古写真

石造物をめぐっては、飛鳥村の村民と、東京の学者との交流が世代を超えて継承されているのが興味深い。石造物の保存や出土地の発掘調査に関して、飛鳥村民が果たした役割はとて大きい。

網干善教の
調査

石神遺跡に再び、発掘調査の鍬が入ったのは戦後のことである。『飛鳥京跡二』¹⁵⁾では、飛鳥小学校付近でおこなった予備調査の記事が見えている（164頁）。その報文からは、飛鳥小学校の北側を「北方遺構」と仮称し、その発掘調査をおこなったことと、その契機が昭和35年（1960）の小学校改築時におこなった事前調査で検出した「敷石遺構」であったことが読みとれる。この一文によると、中岡清一が飛鳥小学校の北側で発見した「敷石状の遺構」の一部を、昭和35年調査でも再確認していたことになる。ところがこのときの発掘調査が部分的であったため、「今回は新しく飛鳥小学校の東側で三本のトレンチを設定し、遺跡の予察を行なうことにした」とある。これが網干善教による、昭和39年（1964）の発掘調査である。

調査範囲は「飛鳥小学校校舎のすぐ東側の位置よりほぼ東西方向に長さ五〇米の東西方向のトレンチ」であったが、敷石遺構は確認できなかった。しかし「地表下七、八十糎下には焼土が一面にあり、そのなかには須恵器、土師器が混在」していたといい、「やはり宮跡関係の遺構があるもの」と考えている。飛鳥小学校のすぐ東側は、奈文研が実施した第5次調査の調査範囲にあたる。その調査日誌によれば、耕作土を除去し終えた時点で、1985年7月16日から同月22日にかけて、調査区を東西に横断する「網干トレンチ」を確認している。このトレンチはTDからTFラインにかけての6m幅で東西に延び、日誌記事からは3ヵ所に深掘区を設けていたことがうかがえる¹⁶⁾。なお、小学校東側に設けたもうひとつのトレンチは第7次調査地にあったが、その検出状況は日誌ではほぼわからない。

網干善教の発掘調査は、さらに石造物出土地の東南方にもおよんでいる。調査地は小字戒重田（飛鳥298）の水田で、石神第1次調査地の東南に位置する。「かつて須弥山石並びに同祖神像が出土した字石神の東南の位置にあたるところに南北方向に幅約五米、長さ三〇米のトレンチを設定し」、このときは「瓦破片の堆積が多くみられ」たという。

浄御原宮説
のその後

昭和4年の小規模調査で確認されていた飛鳥小学校北側の「石葺」は、その一部が今も露出展示されており、奈文研の第1次調査時にも参考にされた形跡がある。また第2次調査のときも、SX327に連なる石敷SX359を、当座は「天武朝敷石」と考えていたことが当時の日誌からうかがえる（5月25日日誌記事）。喜田や中岡の飛鳥浄御原宮説は、奈文研の発掘調査においても、遺構の解釈にある種の先入観を与えることがあった。

さらにその後、第7次調査（1987・1988）時には、「露出保存されている石敷（飛鳥浄御原宮推定地）」を西区と称し、石敷の清掃と実測調査とをあわせて実施している。その概要報告で、これは石敷SX1310として再報告され、A3期の石敷であるSX1270とは一連のものとしている。SX1270は第6次調査で検出した四面庇建物SB1100の北石敷SX1105と一体とされ、これもA3期の遺構とされる（『藤原概報18』58頁、1988年）。つまり、中岡が発見した石敷SX1310は天武朝まで降らず、この時点では斉明朝頃の遺構とされたのである。現在では、石敷が見つかったから浄御原宮という論法は採用されないが、喜田や中岡の浄御原宮説は、1980年代まで影響力を有していたことになる。

奈文研が小字石神の水田を再発掘することにした動機は、①そこが須弥山像・石人像の出土

地で、斉明紀に見える須弥山造立記事との関連性がうかがえること、②喜田貞吉以来、ここが飛鳥浄御原宮に推定されてきたことにくわえ、③中ツ道と壬申の乱時の「飛鳥寺北路」との交差点が遺跡の東南部に想定されるようになったことの、以上3点である（『藤原概報12』1982年）。しかし発掘調査が年ごとに進むにつれ、浄御原宮のことはほとんど語られなくなり、「飛鳥浄御原宮推定地の調査」という触れ込みも、『藤原概報』では第3次調査から見られなくなる。

「斉明朝の饗宴施設」説へと傾斜を強める代わりに、「飛鳥浄御原宮」説の追究が先細りになった背景には、奈良県立橿原考古学研究所がおこなった飛鳥京跡の発掘調査と、『飛鳥京跡』の刊行があると思われる。末永雅雄がややためらいつつも、伝飛鳥板蓋宮跡の上層遺構が浄御原宮であった可能性に触れてから、その推定地は岡周辺と、小字石神周辺との2ヵ所になった。¹⁸⁾しかし奈文研の継続的な発掘調査によっても、飛鳥浄御原宮の宮殿遺構は結局見つからなかった。石神遺跡を飛鳥浄御原宮に当てる説は、今では旧説というべきであろう。

斉明朝期の饗宴施設、または迎賓館という印象がすでに定着した石神遺跡であるが、そのB期の建物遺構を「小墾田兵庫」に当てる説がある。この施設は壬申の乱時に、近江方の穂積臣百足が拠とした武器庫で、『日本書記』天武元年六月巳丑条に見える。

新 た な
遺 跡 観

上述のとおり、相原嘉之は石神遺跡の整地土から鉄鏃多数が出土していることも加味し、総柱建物が小墾田兵庫にあたる可能性を指摘した。¹⁹⁾その後相原は、小墾田兵庫が壬申の乱の関連記事に見えることから、B期建物群が672年時点で存在していたとも考えている。²⁰⁾総柱建物が小墾田兵庫であったかはさておき、遺跡周辺にこの施設が存在していたことが強く想起されるわけである。

このほか、石神遺跡の変遷や構造を独自に検討した結果、A期遺構群は饗宴施設ではなく、中大兄皇子の皇子宫であったと考えた重見泰の²¹⁾説がある。この仮説によれば、石神遺跡出土の新羅土器や東国系土師器（黒色土器）は、A期遺構群が斉明朝の饗宴施設である根拠になりえない、という。確かに近年、石神遺跡で出土した東北系黒色土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器に伴出していることがあきらかとなり、斉明朝にはなく、飛鳥浄御原宮期以降に東北地方から持ち込まれた可能性が高い。²²⁾したがって重見が指摘したように、東国系土師器は饗宴施設の証拠にはならない。しかしこの説も、奈文研の刊行物でこれまでに公表された遺構変遷案に基づくものであるから、遺構変遷の見直しや、出土遺物の再検討をふまえた案ではない。饗宴施設説に対する異論として、その意義は認めるものの、皇子宫説は必ず正否が問われるであろう。

ここまで縷々述べてきたように、石造物出土時から現在にいたるまでの間、石神遺跡の性格に関する学説が次々に生まれ、場合によってはこれらの融合によって、確固たるイメージが醸成されてきた。このうち、最も影響力があったのが「斉明朝の饗宴場」説である。これは石田茂作の噴水塔説を下敷にしつつ、矢島恭介が初めて唱えた学説であるが、じつは高橋健自らの須弥山説とも融合しており、石神遺跡全体を説明するための総合説となった。したがって、奈文研がこれまで踏襲してきた「斉明朝の饗宴施設」説は、高橋らの須弥山説からと、石田・矢島の饗宴場説からの強い影響下において、発掘調査の成果を全体的に解釈するために形成されたのである。およそ120年分の学説史をふまえると、石神遺跡のイメージがどのようにつくられてきたかがよくわかる。しかしこのイメージが、石神遺跡を説明するための唯一のものであるかは、なお検討の余地がある。

学 説 史 の
総 括

- 1) 石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』学生社、1972年。
- 2) 矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58-12、1949年。
- 3) 高橋健自「遠飛鳥宮と飛鳥寺との舊址」『考古界』2-12、1903年。
- 4) 高橋健自「飛鳥発見の石製遺物」『考古界』3-5、1903年。
- 5) 重田定一「飛鳥京の須弥山」『考古界』3-5、1903年。
- 6) 長井 行「博山香炉と飛鳥遺物」『考古界』3-8、1904年。
- 7) 喜田貞吉「飛鳥の京（下の下）」『歴史地理』12-5、1912年。
- 8) 奈良県史料刊行会編『大和名所和歌集 大和志 日本惣国風土記』奈良県史料第3巻、1978年。
同書に収録した「日本輿地通志」畿内部分第二十四 大和国十四高市郡では、「飛鳥浄見原宮」を上居村に比定している（同書429頁）。
- 9) 「小学校敷地の地ならしの際、数多の素焼土器を掘り出した」とあるのは、その東側隣接地である第3次調査地から第7次調査地までの土層に対比すると、「含炭褐色土」と呼ばれた一連の褐色系土に相当する可能性が高い。この土層からはおもに飛鳥Ⅳに属する、膨大な量の土器が出土している。
- 10) 中岡清一「飛鳥浄見原宮ノ一部発掘ニ就テ＝宮瀧ニ於ケル吉野離宮トノ関係明瞭トナラン＝」1929年。
- 11) 石田、前掲註1) 論文。
- 12) 飛鳥287番地における最近の再調査（飛鳥藤原第214次調査）にとれば、この「川原石群」は古代の遺構ではなく、石田の発掘で露出した基底礫層であった可能性が高い。
- 13) 矢島、前掲註2) 論文。
- 14) この写真に写っている人物を特定するために、2022・2023年に大字飛鳥にて多少の聴き取り調査をおこなったが、撮影時からすでに86年が経過しており、特定できた人物は一部にかぎられた。
- 15) 奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡Ⅱ』奈良県教育委員会、1980年。
- 16) 奈文研の地区割にしたがえば、深掘区はTD・TE25区、TD・TE28区とTD・TE33区の3ヵ所。これらの深掘区は「乱れた石敷」まで既掘であったが、『飛鳥京跡Ⅱ』では「敷石遺構」を確認できなかったとしている。また「地表下七、八十糎下」で確認した焼土は、第5次調査時の「含炭褐色土」にあたるか。
- 17) 昭和4年の発掘調査のとき、小学校の農業実習地で見つかった「石葺」は、昭和10年（1935）の時点でもまだ露出状態であったらしく、そのことが田村吉永の論文に書かれている。田村吉永「斉明紀に見ゆる石上池に就いて」『大和志』2-1、1935年。
- 18) 前掲註15)。前後の文脈は省略するが、その「むすび」において、「現在飛鳥板蓋宮伝承地として調査を進めている」遺跡が、「将来あるいは飛鳥浄御原宮と判定しなければならない」可能性に触れている（同書、374頁）。
- 19) 相原嘉之「小治田宮の土器」『瓦衣千年』1999年、森郁夫先生還暦記念論文集刊行会。
- 20) 相原嘉之「飛鳥古京の攻防—壬申紀にみる小墾田兵庫と留守司—」『琵琶湖と地域文化』林博通先生退任紀年論集、2011年。
- 21) 重見 泰「石神遺跡の再検討」『考古学雑誌』91-1、2007年。
- 22) 土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器—石神遺跡第3～8・11次ほか」『紀要2020』。